

# 日本におけるパラアーチェリーの発展と 日本身体障害者アーチェリー連盟の歩み

パラリンピック(以下、パラ)の前身であるイギリスのストークマンデビル大会は、オランダのアーチェリーチームがイギリスに招待されて国際大会になった。そのため、第2次世界大戦後、アーチェリーはパラスポーツの中で長い歴史を持つといえる。さらに、アーチェリーは、「健常者」と「障がい者」が同じルールのもと、同じ射線から同等に競うことが可能な数少ないパラスポーツのひとつである。

実際、オリンピックに出場した両下肢機能障害・車いす使用(以下、車いす)のリカーブ女子3選手がいる。1984年ロサンゼルス大会のフェアホール選手(ニュージーランド)は、全競技を通じ車いすの選手として史上初めてオリンピックに出場している。次いで、1996年アトランタ大会のパオラ・ファンタ選手(イタリア)、2016年里オ大会のネマティ選手(イラン)で、各選手のオリンピック出場はそれぞれ大きな反響をよんだ。このうちネマティ選手はロンドン2012パラ、リオ2016パラの優勝者で、東京2020パラでは3連覇を目指している。

## 日本のパラアーチェリーの創設期～東京1964パラリンピック

1960年、「日本パラリンピックの父」と呼ばれ、その後1965年に別府・太陽の家を創設する中村裕博士(当時、国立別府病院整形外科科長)がストークマンデビル病院に留学し、グッドマン博士の考えに強い感銘を受けて帰国する。(第2次世界大戦後、イギリス・ストークマンデビル病院の脊髄損傷科初代科長・グッドマン博士はリハビリテーションにスポーツを取り入れ、6ヶ月間という短期間で患者を社会復帰させ、世界中の関係者を驚かせていた)

1961年、中村裕博士の尽力で全国で初めて第1回大分県身体障害者体育大会が開催され、アーチェリー競技も行われた(写真)。

翌1962年、中村裕博士とともに国立別府病院から2名の車いすアーチャーがストークマンデビル大会に初参加する。日本からの参加は世界から大きな評価を受け、東京1964パラ開催の一因となる。そして、同大会開催を契機に日本のパラアーチェリーは飛躍的に発展していく。

当時、アーチェリーは厚生省関連施設で行われ、現・国立障害者リハビリテーションセンター(当時、新宿区にあった)に30mの射場が完成する。そして、最も盛んだった国立療養所箱根病院(以下、箱根療養所)には1962年に50mの射場が完成し(写真)、ここにはわが国の一般アーチェリー界の草分けである小沼英治氏が指導に来られ、神奈川、東京の一般あるいは学生アーチャー達も練習に来ていた。

1964年夏、箱根療養所に90mの射場が完成。当時のトップアーチャー猪俣選手を交えて現・全日本アーチェリー連盟の強化合宿も行われた。当時、一般アーチェリー界も創設期にあったために、同射場を通して多くの交流がなされた。

(少し時代は下るが、和歌山・琴の浦福祉工場では1976年モントリオールオリンピック日本代表の西孝収選手や日本のトップアーチャー松下和幹選手がパラアーチャーと共に練習に励んでいた)

東京1964パラには、箱根療養所の4名の車いすアーチャーがFITAラウンド(以下、ラウンドはR)、アルピオンR、ダーチェリーの3種目に出場。個人種目のメダル獲得はなかったものの、団体種目で2つの銀メダルを獲得した。

同パラでは、第1部・国際大会はストークマンデビル大会同様、車いすアーチャーの参加であったが、同時開催の第2部・国内大会には、他の身体障がいをもつ立位の選手が北海道・奈良・大分、神奈川から9名参加している。

## 全国障害者スポーツ大会の開催

東京1964パラの成功を受け、翌年から一般国体開催県において現・全国障害者スポーツ大会(以下、全スポ)の開催が始まった(写真)。

アーチェリー競技は第1回大会より正式種目となり距離は30mRであったが、その後1979年の第15回大会からは50m・30mRも共に行われるようになり、今日に至っている。

当初から全スポの記録をもとに、現・日本障がい者スポーツ協会が国際大会派遣選手を決めており、派遣費用は国と各都道府県・政令指定都市が負担していた。

そのため、開催側、あるいは代表選手を派遣する側双方の各都道府県・政令指定都市が選手養成に力を入れ、新人発掘、選手の技術力アップに全スポは大いに役立った。選手も全スポで好成績をおさめると国際大会に日本代表選手として派遣され、海外選手と競えることが大きな目標と励みとなっていた。

この頃、雑誌「アーチェリー」(阪本企画発行)でのパラアーチェリー特集記事の頻繁な掲載は、身障者および健常者に大きなニュースとして伝わっている。

## フェニックス杯の初開催と連盟結成

このような状況下、関係者の努力のもと、1973年5月に第1回フェニックス杯全国身体障害者アーチェリー大会が神奈川県・剣山フィールドアーチェリー場で開催され、同年10月に第2回大会が開催された。第1回大会は30mRのみで、関東近県から10名の参加者だったが、第2回大会からは50・30mRが加わり、和歌山、兵庫からの参加があった。第3回大会からは年1回秋に開催されるようになり、第4回大



東京1964パラリンピック大会パンフレットの表紙にパラアーチャーが掲載



1961年 第1回大分県身体障害者体育大会選手は和弓で大会にのぞんだ



1963年 箱根療養所の練習風景

1980年代 全国障害者スポーツ大会での入場行進



最近の全国障害者スポーツ大会

会からは会場を神奈川県立総合リハビリテーションセンターに移し、FITAシングルRも行われるようになった(写真)。その後、全国からの参加者が年々増え続けていった。

なお、フェニックス杯の実行委員が中心となり、1976年、日本身体障害者アーチェリー連盟(以下、連盟)が設立され、全国各地のパラアーチェリーの振興・発展に力を注ぐことになる。初代会長は黒川喜寿氏、財務ほどなく理事長は山崎昇氏であった。

## 全国各地でクラブ数、大会数が増加

1974年当時、大阪市を始めとして全国各地に障害者スポーツ施設が次々と建てられ、身障者の中にも「静」のスポーツであるアーチェリーなら自分にもできると初心者教室に参加し始める人が多かった。

これら初心者教室参加者や同施設を練習場所として通い始めた国際大会あるいは全スポ経験の地元の選手らが中心となってクラブが結成され始め(写真左)、現在では全国に24クラブ(団体)が結成されている。【表1】

また、リハビリテーションセンターや福祉施設では敷地が広く射場のある施設もあり、屋外アーチェリー大会が開催され始める【表2】。他方、障害者スポーツ施設では、施設側の理解も深く、室内アーチェリー大会が比較的容易に開催されていく。(写真右)【表3】

これら全国各地の大会は、同施設や地元一般アーチェリー協会等の協力を得て、1970年代にすでに8大会開催していたが、現在では37大会とその数は飛躍的に増えている。これには、地元の尽力はもとより、各選手が自費、遠方にもかかわらず、実に多くの大会に参加し、他クラブとの交流を深めてパラアーチェリーを盛んにしていったことによると思われる。



1975年 第4回フェニックス杯  
1人目・久保氏、2人目・黒川元会長

{表1} 全国の障害者アーチェリークラブ・団体

- ①北海道・東北・・・北海道身障者A協会、山形県身障者A協会
- ②関東甲信越・・・茨城県身障者A協会、埼玉県障害者A協会、東京都身障者A協会、栃木県身障者A協会、神奈川県身障者A協会、千葉県身障者A協会、長野県障害者A協会
- ③東海・近畿・・・愛知・フリンゴAC、三重・シューティングスターズAC、京都障害者A連盟、滋賀HITTOAC、兵庫玉津AC、和歌山SS KAC、大阪パラA
- ④中四国・・・岡山アローC、広島県身障者A協会、鳥取県身障者A協会、山口県身障者A協会、香川県身障者AC、愛媛県パラA協会
- ⑤九州・・・福岡県身障者A協会、大分県身障者A協会

略) 身障者:身体障害者、A:アーチェリー、C:クラブ

{表2} 障害者施設での屋外アーチェリー大会会場

- ①FITAシングルR・・・神奈川県総合リハビリテーションセンター(フェニックス杯、七沢杯)、埼玉県障害者交流センター(JPAF杯、交流A大会)、国立障害者リハビリテーションセンター(さくら杯)、ファインプラザ大阪(持ち回り近畿大会)。

- ②50m以下・・・群馬県立ふれあいスポーツプラザ(群馬ふれあいA大会)、東京都障害者総合スポーツセンター(はばたきA大会、王子オープンA大会、アチャー杯)、サンアビリティーズ今治(今治市長杯)。

{表3} 障害者施設での室内アーチェリー大会会場

- ①北海道・東北・・・山形市福祉体育館(みちのく杯室内)
- ②関東甲信越・・・東京都多摩障害者スポーツセンター
- ③東海・近畿・・・名古屋市障害者スポーツセンター(東海障害者インドア、フリンゴインドア)、滋賀県立障害者福祉センター(びわ湖杯インドア)、大阪市舞洲障がい者スポーツセンター(舞洲インドア)、兵庫県立障害者スポーツ交流館(のじぎく杯室内)
- ④中四国・・・岡山市障害者体育センター(岡山市障害者親善)、福山市障害者体育センター(近県親善インドア、広島県身障者インドア)、かがわ総合リハビリテーション福祉センター(源平杯インドア)
- ⑤九州・・・福岡県春日市クローバープラザ(九州身障者インドア)、北九州市障害者スポーツセンターアレアス(北九州インドア)、福岡市立障がい者スポーツセンター(博多っ子インドア)



1976年 スロープや的台の高さを工夫した  
50・30mの射場完成 兵庫・玉津AC



1979年 のじぎく杯室内大会  
現・兵庫県立障害者スポーツ交流館

## ブロック大会・後援大会

1976年から選手のレベルアップや情報交換を目的に、各地域の連盟登録員が中心となって、ブロック単位の身体障害者アーチェリー大会(当時、50-30m、30m等)が都府県持ち回りで開催される。同年九州、1979年中四国、1980年関東・甲信越、1981年近畿と立て続けに開催され始めた。

大会開催は、会場、審判員、矢取りなどの問題が山積みされるが、各ブロックの連盟登録員は粘り強く解決し、継続開催にこぎつけていった。

一方、1976年に第1回ののじぎく杯が兵庫で開催された(当初よりFITAシングルR)。フェニックス杯(当時神奈川)まで遠くまで行きづらくても、兵庫で身障トップ選手らと競えるので、関西、中四国、九州、そして関東から参加者が集まった。

又、フェニックス杯、のじぎく杯にも行きづらい熊本で1978年に第1回火の国杯が開催され(1984年からFITAシングルR採用)、多くの参加者を集めた。これら2大会は兵庫、熊本と地域限定で開催されている。

以上の6大会は、当初より連盟の後援大会となり、現在までも続いている。

## アーチェリーなかまの発行・ホームページの活用

情報交換誌「アーチェリーなかま」は、途中中断もあったが、連盟設立当初の1979年より現在に至るまで発行され、全国各地の情報を連盟登録員に発信し続けている。掲載記事は、大会日程・記録・情報、合宿報告、登録団体の活動状況、理事会議事録、役員紹介、アーチェリーと私、会長との一問一答、ランキング表、上位成績(1050点アップ)者のプロフィール、ナショナルチーム等多岐にわたってきた。

なお、ホームページは2017年10月に改められ、連盟からのニュース・メディアリリース・イベントの様子などを動画を含めて掲載している。また、国内大会の予定・結果をはじめ国際大会の情報もリアルタイムに掲載している。他に、公式フェイスブック・ツイッター・インスタグラムアカウントを開設し、パラアーチェリーの魅力を発信している。

## アーチェリーなかまランキング

1981年からアーチェリーなかまランキングがつくられる。1976年に岡西三千夫選手(両下肢機能障害)が全日本ターゲットアーチェリー選手権大会に出場。当時、誰が続いて同大会に出場するか、誰が初めて1200点アップするかという2点が話題になっていた。皆がFITAシングルRで高得点を競い始め、様々な噂が飛び交った。

そこで連盟では、全日本アーチェリー連盟公認大会で出した記録を正式記録と認め、事務局・広報が記録を集めてアーチェリーなかまランキングをつくり、アーチェリーなかま毎年発表した。その際、1050点アップ各選手のプロフィールも毎号紹介したので、当時、1000点アップを目指す選手達の大きな励みともなった。なお、このランキングは、現在のランキング表に引き継がれている。

## 夏合宿

車いす使用の男子では、90mの点数が伸び悩む選手が多いことから、1977年、地元で90mの練習場所がない選手のために神奈川県立総合リハビリテーションセンターで夏の練習会が実施された。

それがきっかけで1980年からは連盟事業となり、第1回夏合宿が農協共済・中伊豆リハビリテーションセンターで開催された(写真)。参加者は北海道から鳥取迄の希望者20名。内容は自由練習、記録会、夕食後のミーティング等であった(写真右上)。

なお、1984年の第5回合宿からは、参加者数の増加や遠距離移動の問題もあり、東西2地区で開催されるようになる。夏合宿は約20年間続き、選手間の交流と技術力向上に大いに役立った。

1984年 第5回夏合宿・ミーティング  
中央・梶川コーチ、右側・井上選手  
於奈良県心身障害者福祉センター



1980年 第1回夏合宿・記録会 於中伊豆リハセンター

## 主催大会・フェニックス杯とJPAF杯

フェニックス杯は年々発展し続けていった(写真)。第11回大会(1982年)からは「厚生労働大臣杯争奪」となり、同大会から団体戦が始まった。第13回大会(1984年)からはFITAシングルRが全日本アーチェリー連盟公認となった。

又、同じシューティングラインに立つことで参加選手の技術力向上に役立てようと、連盟事業に精力的に取り組んでいた山崎昇元理事長らの尽力で海外のトップパラアーチャーをフェニックス杯に招待した。第10回大会(1981年)のドイツ選手2名を始めとして、その後、韓国、香港、オーストラリア選手と続いた。

さらに、「フェスピックアーチェリー選手権大会」が神奈川県・伊勢原市で第28回大会(1999年)と同時開催され、多くのフェニックス杯参加者がアジアトップのパラアーチャーと接したことは大きな意義があった。

一方、第18回大会(1989年)まではフェニックス杯発祥の地、神奈川で毎年開催されたが、全国規模の普及を目指して3年に1度は県外で開催することとし、第19回大会は大阪で開催された。その後、地元でも開催してほしいという連盟登録員の長年の要望もあって、連盟創立20周年を契機に第25回大会(1996年)からは全国5ブロックを輪番で巡ることとなった。

第44回大会(2015年)からは「文部科学大臣杯争奪全国身体障害者アーチェリー選手権大会フェニックス・大会」となり、現在、パラアーチェリーの国内最高峰の大会となっている。

他方、1998年からはオリンピックR形式の試合として日本パラリンピック委員会が主催し「ジャパンパラアーチェリー競技大会」が始まったが、2013年の終了を受け、2014年から当連盟の主催で「JPAF杯パラアーチェリートーナメント大会」となった(写真)。同大会はフェニックス杯同様、現在、国内最高峰の大会の一つである。



1984年 第13回フェニックス杯  
狭くなってきた神奈川リハの射場



最近のJPAF杯パラアーチェリートーナメント大会

## ナショナルチーム発足と強化事業

かつて国際大会派遣選手は全スポの記録をもとに現・日本障がい者スポーツ協会が決めていたが、ソウル1988パラからは各競技団体が選手の推薦、アトランタ1996パラからは選手とコーチの推薦を任されるようになった。

これを受け、連盟は1992年にナショナルチームを発足させた。東京1964パラ以来、国際大会は日本代表選手にとって海外選手と競うことが出来る場であったが、この頃から連盟は、恒常的にメダルを獲得できる選手の養成を望まれ始めた。

初めてのナショナルチームメンバー(現・強化指定選手)は、本人が連盟に提出した全ア連公認記録のうち、FITAシングルR上位3記録の平均点の上位者から、性別と障害分類(脊損(現・W2)、頸損(現・W1)、立位(現・ST)の3つ)を考慮して男子9名、女子3名が選ばれた(リカーブ部門のみ)。同メンバーは技術力向上のために強化合宿に参加し、連盟はさらに選考の上、パラリンピックを含む国際大会に推薦した。当時スタッフは、理事長、事務局/強化担当がその任にあたった(現在は、強化委員会)。

その後、北京2008パラからはリカーブ部門に加えコンパウンド部門が導入され、同部門で神谷千恵子選手が初のメダル(銀)を獲得。又、ロンドン2012パラからは、団体戦(男子3名あるいは女子3名)はなくなり、MIX戦(男子1名プラス女子1名)が加わった。

2013年、東京2020パラ開催が決定されると企業からのアスリート雇用が拡大する。JOC(日本オリンピック委員会)・JPC(日本パラリンピック委員会)の窓口によりアスリート契約選手が次々と誕生し、それまで選手が苦勞していた休日の取得、費用の負担が軽減され、アーチェリーに向かう時間も大きく増えた。

現在、強化指定選手は、全ア連公認の70mR(リカーブ部門)・50mR(コンパウンド部門)の記録を参考記録として毎年決められるが、2020年は男子7名、女子4名が選ばれ、強化合宿(年5回)および国際大会に派遣されている。

また連盟は、JPC(日本パラリンピック委員会)からの選任スタッフ制度も活用することができ、専任コーチ2名、専任トレーナー(PT)1名を確保することができた。さらに、医・科学情報分野の外部スタッフとの契約もでき、選手中心のケアが充実された。組織体制では委員会制度が確立し、クラス分け/アンチ・ドーピング・強化・選考委員会がつけられ、ガバナンスコードに沿った組織運営を進めている。

## 国際大会派遣

東京1964パラの4年後、イスラエル1968パラには女子選手2名を含む6名が日本から参加。女子選手の参加は初であった。ハイデルベルク1972パラでは、日本選手団25名中ほぼ半数の11名がアーチェリー競技に参加した。この頃のアーチェリー人気は非常に高いものであった。

そして、トロント1976パラでは個人種目で男女ともに初の金メダルを獲得するなど、これまで日本はパラリンピックで金5・銀12・銅9の計26個のメダルを獲得している。その中には、4大会にわたり出場し、個人戦での金メダルを含む5個のメダルを手にした鈴木一二美選手(両下肢機能障害)(写真左)や、バルセロナ1992パラの個人戦金メダリストで、現在も現役で選手活動を続けている南浩一選手(両上下肢機能障害)(写真右)らがいる。



1989年神戸フェスピック  
鈴木一二美選手(左)  
右側は松枝滋子選手



1992年バルセロナパラ  
個人戦優勝の南浩一選手

なお、パラリンピック以外の国際大会では、前述したストックマンデビル大会には1994年迄ほぼ毎年派遣された。パラリンピックは4年に1度開催されるが、その間の年はストックマンデビル大会が同病院で開催されていたことによる。

(ただし、派遣されていた国際大会のうち、この大会のみ選手は車いすアスリートに限られていた)

他、中村裕博士の提案により、欧米に比べて国際大会の開催数が少なかった環太平洋地域で1975年第1回フェスピックが大分で開催された。概ね4年に1度開催され、2006年第9回大会で終了したが、日本からは毎回派遣された。

近年では、パラリンピック大会の前年と翌年に開催されるパラ世界選手権はパラリンピック同様、国内競技団体の評価査定に大きくかわかるため、選手強化の戦略として積極的に参加している。

又、個人の世界ランキングが重要視され、パラリンピック出場枠を獲得するため、世界ランキングトーナメント大会(WRTと表記。毎年ドバイで開催)およびヨーロッパカップ、アジアパラ大会(4年ごとの総合大会)、アジアパラアーチェリー選手権大会への参加が定例となっている。これらの国際大会でのメダル獲得をとおして、パラリンピックでのメダル獲得に繋がるよう選手のスキルアップに繋げている。

一方、当連盟の国際交流の一環として、希望者を募って交流大会に選手、役員とも自費参加してきた。1983年のアメリカ・ベガスシュート11名(写真)を皮切りに香港親善大会、ヨーロッパ選手権、そして、1993年からは韓国との交流大会が始まり、毎年韓国から日本、日本から韓国へと交流を深めた(写真)。その後同大会には、1998年関東ブロック、1999年関西ブロックとブロックごとに選手、役員を決めて遠征し好評だったが、1999年で終了した。

交流大会には、当時のパラリンピックの基準点であったFITAシングルR1080点以上という最低基準はあったものの、これから国際大会で活躍したいという選手にも門戸を開き、大きな励みとなっていた。



1983年、アメリカ・ベガスシュートに参加



1993年 第1回韓国との交流大会。左端が山崎元理事長

## 一般大会への出場

冒頭でふれたように、障害の有無にかかわらず、同じルールのもと、同じシューティングラインから競うことができるのがアーチェリー競技の特徴のひとつであるが、国内最高峰の大会にもパラアーチャーは参加の可能性を広げてきた。

全日本ターゲットアーチェリー選手権大会・リカーブ部門に、東京1964パラ当時、箱根療養所でアーチェリーをしていた安藤選手が、1963年の第6回大会(於箱根後楽園レンジ)から1964年、1965年と3年連続で出場している。当時の同療養所入所生のアーチェリーレベルが一般アーチャーに比しても高いものであったことが伺い知れる。

その後も、岡西・西井・米澤・佐藤・重定選手と、当時トップのパラアーチャー達が現在まで引き続き、同大会に出場している【表4】。

一方、オリンピックにコンパウンド部門がないために、リカーブ部門より一般の選手人口が少なく門戸が広いとはいえ、国内最高峰の大会だけに出場が難しいコンパウンド部門にも、2015年から選手は出場してきた【表5】。その中で、平沢選手は2015年、永野選手選手は2017年に第3位に輝いている。

なお、近々の2020年、同大会にはリカーブ部門1名、コンパウンド部門6名の計7名が出場した。これら選手の一挙増加は、東京2020パラの盛り上がり日本選手のレベル向上に繋がったと思われる。因みに、大江選手と平沢選手は1回戦で敗れたものの予選を突破し健闘した。

又、全日本ターゲットアーチェリー選手権大会は基準点を2回クリアして上位者から出場できるが、1回のクリアで出場できる全日本社会人選手権大会には、これ迄多くのパラアーチャーが出場してきた。そのうち、コンパウンドの部で近年2018年に宮本リオン選手が優勝、安島裕選手が準優勝に輝き、2019年に永野美穂選手が優勝したことは特筆すべきであろう。

他方、1980年、国民体育大会にアーチェリー競技が正式種目として採用され、壮年の部もあることから、各都道府県代表としてパラアーチャーが毎年出場してきた。

{表4}全日本ターゲットアーチェリー選手権大会  
出場選手名:リカーブ部門

1963・64・65年	神奈川・安藤昇一(車いす)
1976年	兵庫・岡西三千夫(車いす)
1991年	京都・西井賢一(立位)
1991・92年	北海道・米澤昌子(立位)
1994・95年	青森・佐藤雅夫(立位)
2001・04・05年	宮城・小野寺公正(立位)
2020年	福岡・重定知佳(車いす)

注)安藤・岡西・重定選手(両下肢機能障害)  
西井・米澤選手(左下肢機能障害)  
佐藤選手(左大腿切断)  
小野寺選手(右膝離断;右大腿切断)

{表5}全日本ターゲットアーチェリー選手権大会  
出場選手名:コンパウンド部門

2015年	埼玉・平沢奈古(車いす)第3位
2017年	愛媛・永野美穂(立位)第3位
2020年	岡山・大江佑弥(立位)、 東京・服部和正(立位)、東京・安島裕(車いす) 大分・篠原彩(車いす)、愛媛・永野美穂(立位) 埼玉・平沢奈古(車いす)

注)平沢・安島・篠原・服部選手  
(両下肢機能障害)  
永野選手(右上肢全廃)  
大江選手(右上肢全廃、右下肢機能障害)

## TOPIC

(2020年3月末時点での連盟会員数は242名)

2017年4月に当連盟は、一般社団法人日本身体障害者アーチェリー連盟(JAPAN PARA ARCHERY FEDERATION)として法人化、英語表記名の変更を行った。

なお、東京2020パラに際しての注目選手は、すでに出場が内定しているリオパラ7位入賞、2020年10月31日現在男子リカーブオープン世界ランキング2位の上山友裕選手(両下肢機能障害)(写真)があげられる。

### 【参考文献】

日本身体障害者アーチェリー連盟情報交換誌「アーチェリーなかま」  
日本身体障害者アーチェリー連盟「結成10周年記念誌」  
日本パラリンピック委員会HP

【文責】 谷 幸子



最近の上山友裕選手